

第54回岐阜大学経営協議会 議事要旨

- 1 日 時 平成24年10月9日（火）14時00分～15時40分
- 2 場 所 岐阜大学サテライトキャンパス多目的講義室（大）
- 3 出席者 森（議長），大熊，岡本，勝野，神谷，小出，佐々木，八嶋，岡野，小見山，吉村，杉戸，岩間，廣田の各委員
オブザーバー：
早川教育学部長，竹内地域科学部長，清島医学系研究科・医学部長，六郷工学部長，金丸応用生物科学部長，吉田監事，山田監事，水谷学長特別顧問
- 4 議事要旨の確認について
第53回の経営協議会議事要旨（案）を原案どおり確認した。
- 5 報告事項
 - （1）教育組織の再編等大学改革への取組状況について
八嶋委員から，資料1に基づき，教育組織の再編等大学改革への取組状況について報告があった。教育組織の見直しとして，教育学研究科の専攻構成を現在の4専攻から，平成25年4月に3専攻として改組するよう大学設置・学校法人審議会へ提出し，設置が可能とされたこと，8月9日（木）に鳥取大学と共同獣医学科についての協定書を締結したことの報告があった。次いで，大学教育改革に向けた公募事業等の状況として，現在，「国立大学改革強化推進補助金」として，「岐阜大学・鳥取大学共同獣医学科設置及び共同獣医学教育に関する調査協力体制の整備」を申請していること，「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業（地域連携）」として，三重大学が代表となり申請を行った「地域・産業界との対話・連携を通じた教育改革力の強化」が採択されたことの説明があった。
 - （2）平成23年度に係る業務の実績に関する評価結果（原案）について
八嶋委員から，資料2に基づき，平成23年度に係る業務の実績に関する評価結果（原案）について，国立大学法人評価委員会から通知された旨の報告があった。なお，項目別評価について，「業務運営の改善及び効率化に関する目標」等の4項目すべてが「中期計画の達成に向けて順調に進んでいる」との評定であった旨の説明があった。次いで，本学の注目される事項について詳細な説明があった。
 - （3）平成25年度及び平成26年度入試の変更点について
岡野委員から，資料3に基づき，平成25年度及び平成26年度入試の変更点について説明があった。

委員による主な意見等は次のとおり。（○：質問・意見 ●：回答）

- 鳥取大学との共同獣医学科の設置で、単独の獣医学課程は無くなるのか。また、募集要項の人数は別枠となっているのか。
- 一般入試の26名、推薦入試の4名は、いずれも岐阜大学の募集人数である。
- 学部教育については、北海道大学と帯広畜産大学、岩手大学と東京農工大学、山口大学と鹿児島大学、岐阜大学と鳥取大学が平成24年度から25年度にかけて共同獣医学部、共同獣医学科を設置し、一定の地域性をもった連携となる。なお、現在、大学院博士後期課程は本学を基幹校とし、帯広畜産大学、岩手大学、東京農工大学が連携した「岐阜大学連合獣医学研究科」及び山口大学を基幹校とし、鳥取大学、鹿児島大学が連携した「山口大学連合獣医学研究科」が設置されており、現在は、学部教育と大学院教育で捻じれが生じている状況である。
- 大学として、どのような考え方、方向性を重視して、学部の入試改善につなげているのか。大学としての基本的方針、考え方をお教え願いたい。
- 大学は人材養成を目的としているので、この地域で活躍できる人材を養成したい。その際にはある程度の学力が必要である。工学部の入試の変更点としては、今まで9学科に分かれており、受験生にとって学科が非常に分かりにくいので、そこを分かりやすくする。また、志願倍率減少のリスクを伴うが、平成26年度から英語を入試に導入し、工学部でも英語のできる人材を養成したい。大学全体の方針として、優秀な学生を確保するというところで、後期日程の募集枠を増加しているところである。
- 英語を追加するのは良いことだと思う。また、コミュニケーション能力を見るための面接試験の実施等、様々な工夫をされており、非常に良い。
- 私共の会社でも採用面接を行っており、面接点のウエイトを高くしている。大学入試では難しいかもしれないが、人数を絞った段階で面接を行えば、良い人材を集めることができる。また、英語を重視するのは、国際化ということだけでなく、社会において、英語ができない者は努力家でないと見なされており、学生の真面目さを問うには、英語が一番良い。英語を入試科目に追加するのは良いことである。
- 教員養成学部にも面接を導入するのは良いことだ。今後、教員養成学部の入試には様々な工夫をしていただきたい。
- 医学部では、数年前から面接を導入することを議論してきた。ここ2、3年に入学した学生の傾向として、学力一本でやってきた学生の中に問題学生が多いため、平成26年度から面接を導入することとした。
- 少子化が進んでおり、18歳人口の取り合いもあり、なるべく募集しやすい配慮も必要であると思うが、入試の変更については、あまり変更するのも問題があるので、流れを見ながら、少しずつ対応を考えたい。

（4）平成23年度卒業・修了者の就職状況等について

岡野委員から、資料4に基づき、平成23年度卒業・修了者の就職状況等について説明があった。

委員による主な意見等は次のとおり。(○：質問・意見 ●：回答)

○教育学研究科の修士課程と教職大学院それぞれの就職状況はどうか。

●教職大学院は定員20名のうち、14名が現職教員となっており、修了とともに県教員に戻ることになっている。また、ストレートマスターで教員採用試験を受ける者は、ほぼ教員採用試験に合格している。しかしながら、中学校、高等学校の教科の中には、非常に競争率の高い教科もあり、教育学研究科全体として、全員が合格しているわけではない。年毎に教員の採用数に変動があるので、その影響を受けてしまう。また、教育行政、文化行政へ就職を希望し、公務員採用試験を受ける者がいるが、近年、採用試験も難しくなっており、希望を叶えることができない者もいるという状況である。

○20名中14名が現職教員だということだが、国はストレートマスターを増やしたいという意向もあり、年々増加が求められている。大学として教職大学院の更なる改善を実現すれば、ストレートマスターについても対応できるので、中身と方向性について改善の努力をお願いしたい。

(5) 平成25年度概算要求の概要について

杉戸委員から、資料5に基づき、平成25年度国立大学法人運営費交付金概算要求の構成及び文部科学省から財務省に要求された事項について説明があった。

(6) 大学改革実行プランへの対応について

議長から、資料6に基づき、大学改革実行プランへの対応について、文部科学省及び本学の動きの詳細な報告があった。

委員による主な意見等は次のとおり。(○：質問・意見 ●：回答)

○日本の教育制度はグローバル化を叫びながら、制度に対してドメスティックな部分がある。先進国の大学は、基本的に理系、文系の区分は無く、広く全ての学問を教えている。それに対して、日本の大学は専門学校のようなものである。粒揃え教育ではなく、粒違い教育を行うのが民主主義の基本である。教育制度そのものは変えられないと思うが、発想の転換をもって、現在の制度の中で何ができるのかを考えて欲しい。これは結果としてグローバルな人材を育むこととなると思われる。

●法人化したとはいえ、運営費交付金に依存しているのは事実であり、教職員の給与も国家公務員に倣えといった縛りの中で個性化を進めるということで、かなり苦しい努力をしている。「教育に軸足を置いた教育・研究大学」を理念として、5つの学部が良い意味で今以上に社会に対してオープンなものとなり、地域貢献に関しては明瞭な線を出すように努

力したいと考えている。

○岐阜大学は非常に個性ある大学である。工学部は社会のニーズに合わせて形で学科・専攻を設置している。今、迫られているのは、岐阜大学の個性を集中的にどこに絞った形で将来に向かっていくかということであるが、一番難しいのは大学には構成員がおり、簡単に動かすことはできないということである。工学部、医学部はそこが顕著に表れる。教育学部は地元に着した形となっており、日本の中でも一番安定していると思われる。方法はあると思うので、大胆な形で新しい仕組みを示してほしい。

●工学部は社会のニーズに合わせて学科改組、入試の変更等を行っており、入学後、学部内で人材を養成し、地域社会に送り出している。更に、エネルギーの問題、環境の問題、防災の問題等を今求められている課題を踏まえて、センターを設置し、更に発展させていきたい。

○文部科学省と大学の関わりを振り返ってみると、平成10年前後は、審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」に基づき、各大学は持っている資源を活用して、それぞれの大学が特色を持つべきである、個性化すべきであると述べられた。文部科学省は各大学が改革方針を検討し、推進して欲しいとの立場をとった。それが平成16～17年前後になると、「我が国の高等教育の将来像」答申が出され、その中で、それぞれの大学は機能別分化をすべきである、機能の中で力を入れるべき分野をよく見据えて、組織分野の重点化を図るべきであるとして、機能別分化を進めることとなった。それを着実に推進するために国の補助制度についても、組織補助に重点を置きながら、誘導するような政策的措置を取ってきた。

このような流れの中で、今後、大学が社会的に大きな力を発揮し、社会を支えていくために、それぞれの大学におけるミッションを明らかにしていこうというのが今回の文部科学省の考え方である。今回、国は大学のミッションについて、原案を作るという部分もあると聞いているが、従来大学が進めてきた個性化路線、機能別分化等と上手く接続するものでなければならない。現在、それぞれの大学が検討しているようであるが、そういう考えをしっかりと持って、文部科学省に対して積極的に自己主張していくことが大事である。その意味では、それぞれの大学が従来に比べて、よりしっかりとした展望、確実な方針を持たないといけない。

これからの社会に必要なことは、グローバル化であるといわれている。それに対応した教育とはどういうことなのかについて、様々な取り組みをされているようであるが、各研究科・学部においても、分野を融合的に考える教育が今後ますます必要になってくると思われる。研究科・学部の枠を超えて協力して学生を育てていくことが必要ではないか。分野融合的なものにより積極的に力を入れていくのが重要である。また、学位プログラムを徹底する必要がある。それぞれにおいて体系的なカリキ

ュラムを作り，それを学生がしっかり受講でき，卒業時に取得できる知識・技術を可視的にし，学生も教員もそれに向かってお互いに努力するような姿勢を徹底することが必要である。

- 研究推進・社会連携機構の中に学術院という研究科の枠を超えた教育組織を設置している。一つは環境系，一つは微生物系である。今年度，微生物系の中で研究室ローテーション的な手法も始めている。修士課程，博士課程の一貫教育を含めた内容で，現在試行的に行っている。
- 医学部，工学部，応用生物科学部は，分野を特定することで特色を出していけるようであるが，文系についてどのように特色を出すかが問題である。今，教育改革が求められているのは，実社会において，大学時代の教育は役に立たないというところから一つの反省がきていると思われる。実学だけを重んじて専門学校化してしまうので，社会科学系，文科系はもう少しリベラルアーツに力を入れることが重要である。
- 文系の特色であるが，本学には地域科学部があり，あり方というところでは，学内で更に議論をする必要があると思われる。
- 文系学部の入試科目として，英語は必須科目であるが，数学は必ずしも必須ではない。文系の学生に難しい数学をとということではなく，実社会では様々なコンピュータシステムが稼働しており，システムの，数学的な発想ができることは重要である。また，英語自体はともかくとして，国際人という意味で，世界の人間がどういう発想で生きているのかを考えることができる能力は必要である。現在，この2つが欠けていると思われる。
- 学生が入学後，大学が持っている全ての機能を利活用して卒業できるといったことは重要である。学部を超えた融合を行えば，更に寄与が高まる。岐阜大学が，学生の人生に対して，高い寄与を行うことのできる大学になることは可能である。このような指標は特色として述べることができるのではないか。そういう観点からすると，少子化は一人の学生がゆったりと教育を受けることのできるチャンスである。入学した学生に対して大学の全機能が寄与できることは，大きな価値である。
- 学生は大学の方針を知らずに入学してくることが多く，本学はこのような方針に基づいて教育をし，人材養成し，こういうエビデンスがあることを説明することは重要である。

6 審議事項

(1) 平成24年度資金運用方針の見直しについて

杉戸委員から，平成24年度資金運用方針（案）について審議願いたい旨の発言があり，資料7に基づき変更内容について説明が行われた。審議の結果，了承され，10月11日開催の役員会に附議することとされた。

委員による主な意見等は次のとおり。（○：質問・意見 ●：回答）

○危険分散の面から多くの金融機関と取引していれば保証されるが，スケ

ールメリットを生かすために金融機関を一つにすれば危険度は高まる。
それに対する考えはあるのか。

●年度を跨いだ運用は基本的にはできない。また、岐阜大学から名古屋大学への預け分は大きな額はないので、定期性預金の一部が名古屋大学のスケールメリットに含まれて運用される程度である。

○運用方法については誰が決定するのか。

●実際に運用する際には、各大学が参加するか、しないかの判断をその都度行うので、そういう意味では、リスクの判断についても各大学で行うこととなり、責任の所在は各大学にあることとなる。

●東海地区国立大学法人間で物品の共同購入を開始したが、却って高くなるようである。他にも様々な問題が出てきており、容易ではない。

7 その他

(1) 医学部附属病院の経営状況について

岩間委員から、資料8に基づき、平成24年度累計(4月～8月)の請求額、償却後利益、当期収支差額、入院患者数、外来患者数、平均在院日数等による経営目標達成率について報告があった。続いて、損益計算書、収支計算書について報告があり、目標に向けて順調に推移している旨の説明があった。

(2) 第24回岐阜シンポジウムの開催について

小見山委員から、机上配布資料に基づき、岐阜大学の研究成果を社会に発信するイベントとして、10月15日(月)に本学サテライトキャンパスにおいて、第24回岐阜シンポジウム「複合材料研究センターオープニングシンポジウムー複合材料の実用化拠点を目指してーGCC」を開催する旨の説明があった。

(3) 岐阜大学フェア2012の開催について

小見山委員から、机上配布資料に基づき、岐阜大学の教育や研究を地域に発信するイベントとして、11月2日(金)・3日(土)に岐阜大学フェア2012を開催する旨の説明があり、このうち、2日(金)には、岐阜大学地域交流協力会平成24年度秋の特別講演会として、「日本の宇宙開発の現状と展望」、3日(土)には、第25回岐阜シンポジウムとして、「日本を変える野生動物管理学」を開催する旨の案内があった。

(4) 岐阜大学「多様性活力発揮に向けての女性研究者支援」総括シンポジウムの開催について

議長から、机上配布資料に基づき、岐阜大学多様性活力発揮に向けての女性研究者支援総括シンポジウムとして、12月5日(水)に「男女共同参画大学の実現に向けてー女性研究者支援事業から男女共同参画推進活動へー」を開催する旨の案内があった。

(5) 第33回岐阜大学フォーラムの開催について

議長から、机上配布資料に基づき、第33回岐阜大学フォーラムとして、10月25日(木)に「日本人よ、今こそ、志高く」を開催する旨の案内があった。

(6) 第34回岐阜大学フォーラムの開催について

議長から、机上配布資料に基づき、第34回岐阜大学フォーラムとして、11月15日(木)に「自然環境について考える－「文明の災禍」ということ－」を開催する旨の案内があった。

8 次回の開催日

次回の開催は3月とし、日程調整のうえ、開催することとした。